
ハードボイルドに格好よく

智恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハードボイルドに格好よく

【著者名】

智恵子

NO862D

【あらすじ】

暴力団抗争をハードボイルドな男、勝と、おかまの遙と医学生で泥棒の勇次が面白おかしく活躍して抗争をのりきる「メディ

プロローグ

この美しい神戸の夜景の中に、不穏な一人の男がさまよっていた。
それはやけに汗ばむ、熱い夏の夜だった。

「高野組組長が、本当に平山組の親父さんを狙つとるんだらうか
？」

「ああ、間違いないみたいやで。平山組本家に爆弾仕掛けたそ
うや」

一人の男は、チンピラ風の衣服と下品な面立ちで、繁華街の路地
裏を歩いていた。

「そうかもしかんな。平山組組長が六代目に就任されたときの
反目やしな。せやけど、平山組は日本最大の暴力団やで？たかが系
列組織の高野組なんかが喧嘩を売るかなあ」

「俺の聞いた話ではなあ、高野組には福山組が後ろに付いてる
しいわ」

「え！あの関東一の福山組かいな！」

「ああ、関西進出を狙つとるらしい」

「なんやとーじゃあ、わしらが高野のおやつさん殺つたら福山組
との抗争が始まるんか？」

「ああ、どうせ今の時代に抗争なんて言つても、形だけや。結局
上の方で手打ちして、しまいやろう。でもな、もし高野のおやつさ
ん殺つてしまもたら、わしらの小指をだすか、何かして手打ちやうな
あ」

間抜けな男達だった。こんな男達の小指一本で抗争が終了するな
ら、そんなめでたい話はない。

「わし、やつぱり止めたくなつてきたわ」

「何言つてんねん。ここで逃げたら、わしら極道界の笑い者や。
それどころか、わしらの親父さんに殺されるわ。わしら下つ端が上
に行くには、根性みせなあかん。最近は頭のええ奴が上に登るから

のう。阿呆は阿呆なりに根性でのしあがらなあかんのじや
くだらない話をしながら、二人の男は話題に拳がついていた高野組
組長、高野真治暗殺に向かっていった。

それは、日本最大の暴力団組織平山組の本拠地神戸で始まる、高
野組反逆事件の平山組から初めて仕掛ける攻撃だつた。もちろん、
こんな情けない会話を交わす一人が、暗殺に成功するはずもなく、
平山組六代目組長北原元蔵は怒りの絶頂を向かえていた。

失敗した二人の親分である平山組幹部高知義男は、北原の平山組
事務所に呼ばれ、頭を垂れていた。

「お前は何を考えとんじや。ん? 何とか言つてみい」

「親父さん、すんません。もう一度、わしにチャンスを与えて下
さい」

「お前の組は銭儲けやらしたら、まあ使えるけど、他のことはあ
かんのう。やくざは力じやーもつお前は去ね。銭儲けでもしどらん
か」

ひれ伏す幹部に北原は大声を出して、警護の者を呼んだ。

「おい、誰か! 勝 を呼べ! 早く来るようにな」

そして物語は北原組長の怒りと共に始まるのだった。

少し汗ばむ昼下がりの午後。少し潮の香りを含んだ風が流れるが、不快な気分にはならない。そんな風が流れる中に、お洒落な店が並んでいる。ここは神戸の中心部である三宮である。平日だというのに、買い物客以外に、露出度の高い洋服を着て歩く女や、それを目当てに来る男たちで街は賑わっていた。

「彼女、美人だね。ショッピング中かなあ？」

栗色の髪を軽くかき上げながら、軽薄そうな声を発した青年が、一人の美女に声をかけた。

「ねえねえ、少しくらいこっちを向いてくれてもいいんじゃない？こんな美男子は滅多にお目にかかれないよ？」

自分の口から美男子と言うだけあって、まわりの女の子も振り返る程、かなり整った顔とスリムな体躯の持ち主だった。TシャツとGパン姿で、これ程爽やかに自分を魅せる男は、そういうお目にかかることは出来ないだろう。

しかし、女もそうそうお目にかかれないので綺麗な女だった。夏だと言うのに透き通るような肌が目に焼き付くようだが、それ以上に目を引く漆黒の瞳。印象的で大きな瞳は、少し冷めた雰囲気で気品を漂わせている。そして真っ白なワンピースを風になびかせ、颯爽と歩く。

「ありやりや、完璧に無視はないじゃない。ここまで無視されるとちょっとひり恥ずかしくなっちゃうだろ？」

戯けた姿でさえ様になる男を余所に、黙々と歩き続ける美女は、肩まで伸びた黒髪を真っ白な手ですかした。

「私に話しかけないで」

可憐な鈴の音というより、夏の風に揺られる風鈴のような声を、彼女は男を見ることなく発した。

しかし、自分の姿を見ようが見まいが関係ないように、男は話し

かけるのである。

「わお！綺麗な声だねえ。俺、松浦勇次つていうんだ。君なら勇次つて呼んでいいよ」

「…あなたねえ」

勇次は振り向いて文句を言いかけた彼女に、再び自分の名を言った。

「勇次だつて！」

女はあきれ果た溜息を一つ吐き、再び歩き始めた。

「ねえ、君はなんて言つ名前なの？」

「…」

「歳は？あ、俺は二三歳だけど…まあ歳なんて関係ない。愛さえあれば…」

何気なく隣を歩く勇次に、女は迷惑そうに口を開いた。

「何か用事でもあるんですか？」

「うん、大切な用事！君と一緒にお茶を飲もうと思つてさー。」

女は勇次の勝手ないい草に、呆れた瞳と共に声を出した。

「あのねえ…言いたくなかったけれど、私はやくざの娘なの。さ

あこれで、お茶なんて気分じゃ無くなつたでしょう」

どこか悲しい瞳で女は言い切つた。そして、勇次に背を向け歩き出そうとしたとき、勇次は女に駆け寄り、作りものとは思えない爽やかな笑顔を見せて言つた。

「そんなの俺には関係ないし、君がやくざと言つわけでもないもーん。だから、お茶を飲もうよ」

そう言つて女の腕を掴み、強引に近くの喫茶店に入つた。半分犯罪ではないだろうか…端で見ていた人はそう思つただろう。しかし、端の人は唯の通行人であり、そんな人の思惑など勇次は気にも止めることはなかつた。

事は勇次の思うがままに進んで行く。

「そうか、由美子ちゃんつて言つんだ。名前も綺麗だよね」

勇次の言葉に、クスクス笑いながら、由美子は初めて穏やかな表

情を見せた。

「あなたつて変わってるわね。私は一応なりとも年上なのに、由美子ちゃんなんだなんて…」

まっすぐ伸びた髪を片手でかき上げて、勇次の瞳をまっすぐに見た。

「俺にとつては可愛い女の子には変わりはない！」こう見えても一応医大生だし、知的で大人で優しくて申し分なしだからね」

「本当に、面白いわね。私はもう一十五歳になるのだけれど、一五年前にはあなたみたいな人に会つたわ。あなたほどしゃべる人ではなかつたけれど…」

少し遠い瞳をして、由美子は話し始めた。

「小さい頃から、やくざの娘つて苛められてたの。そのうち苛めるんじやなくて、怖がられて…無視されててね。そんな時、今あなたと同じ事を言ったクラスメイトがいたの。やくざの娘なんて関係ないってね。その人だけよ、私の友達と呼べたのは…。同じクラスの男の子でね。仲良くなつたと思つたら転校しちゃつて…それ以来二人目ね」

由美子は手元にあつた紅茶を飲み干し、席を立つた。

「楽しかつたわ、ありがとう」

チャリンと小銭をテーブルに置いて喫茶店から出よつとした。

「あ、待つて」

勇次の言葉に振り向きもせず、店を出て行く由美子を勇次は追いかけた。たかつた。だが現実には、勇次は勘定を済ませなければならぬ。

「あー。いい。いい。釣りいらないから」

釣りが必要かどうかも解らないが、ポケットにあつた小銭を投げるように支払い、足早に去りつとする由美子を追いかけた。

「何で逃げるのさ」

人通りの少なくなつた路地で、白く細い腕を掴み、勇次は由美子の足を止めた。

「もう用事は済んだでしょ？私、あまり知り合いを作りたくないの。もう、悲しい思いをしたくないもの。抗争が始まつたり、何があると誰かが傷ついたり、離れて行くのよ？それならいつそ、友達とか知り合いなんかいない方がいいじゃない！」

涙が溢れそうで、由美子はうつむき加減に叫んだ。

「じゃあ、彼氏になつてあげようか！」

由美子は不安な顔を上げて、不思議そうに勇次を見つめていた。

「では、さつそくデートに直行！」

慌てふためく由美子の腕を、しつかり握りしめた勇次は勢いよく歩き始めた。

由美子の悲しみが、勇次にはわかつていた。勇次は親もなく、一人で生きてきた過去を持つ者だからだつた。親戚にはたらい回しにされ、通う学校で盜難が続くと、真つ先に疑いを持たれ、友は離れる。何か良くないことがあると、すぐ金に困つてお前がやつただろうと、見下される。由美子とは違うが、同じ仲間を持たずにつきあつた者だつたからだ。

今だつて、親がいるわけでもない。捨てた親、勇次にとつて、親が子を捨てたのではなく、子供である自分が親を捨てたのだ。捨てた親は勇次にとつて、先ほどの通行人と同じである。人生の中で、それ違つただけの人なのだ。そんな親の為に、自分が卑屈になることはない。と、勇次は考える。

由美子ちゃんも、こんなに綺麗んだから、親なんて関係ないよな。んー俺が幸せにしてあげなきやね。

と、他にも思惑を馳せる勇次だつた。

由美子と勇次がデートを楽しんでいる頃、重い空気が流れる平山組事務所の裏口から、二人の男が入ろうとしていた。

「ねえ、勝ちゃん」

天使が人間に化けている錯覚を抱いてしまつ様な美貌の持ち主が、スーパー モデルにしては目つきの鋭い男に声をかけた。

「なんで、表から入らないのさ。勝ちやんは平山組系の親分衆なんかより、よっぽど凄いし、かつこいいのに」

話しかけた内容はさて置き、男とは思えない程、色素の薄い容姿をしている。刈り上げたうなじに軽く波打つ髪がかかり、妙に色っぽい。男とは思えない容姿で透き通るような声であるから、性別が殆ど不明に近かつた。風が吹けば倒れるような華奢な男の体に、低い声が返つた。

「お前がいるからだろう！お前が俺のおやつさんをたぶらかして

…
「人聞き悪いなあ。私が悪い訳じゃないよ？元ちゃんが勝手に私に惚れただけだもーん。」

「元ちゃんは止せと言つてあるだろ？！誰であろうと北原元蔵をそんな風に呼ぶのは俺が許さない」

「勝ちやんつて元ちゃんの事好きよね。もつと私の方を向いてくれないかしら？あんなおじさんより、私の方が綺麗だし可愛いし…。もちろん勝ちやんのことを誰よりも愛してるしや…やっぱり美貌…」
永遠に聞いていても心地良い声だが、勝にとつては耐え難い内容のようだった。

しかるべき所で止めなくては、自分の拳が理性を突き破つて、目の前的小悪魔を殴りそうになる。

「はるか…もういい、黙つて歩いてくれ…」

一人の男は懸命に理性で暴力的行為を抑え、そしてはるかと呼ばれた綺麗な男は、少しの不満を呴きながら組長室についた。

組長室の前の側近が、素晴らしい良い体躯の方を見つけ、挨拶をした。

「ここれは山崎さん、組長がお待ちかねでしたよ…と、はるかさんも！」一緒にしたか…

「なによ、私が一緒に何が困るわけ？」

「いえ、そんなことは…」

「はつきり言つてやれ。お前が来ると、組

長が、むぬけ……」

さすがに組長をふぬけ呼ばわりする「」との出来ない勝は、一瞬口
「」もつた。

「組長が……組長で無くなつてしまつ……そつ、姉さんに申し訳な
いとな」

そう言いながら勝は組長室のドアをノックした。

「勝か」

「はい、お呼びと聞きましたので……」

北原から入室の指示があり、勝はドアノブを回した。

洗礼された家具と置物、茶色を基調とした落ちついた室内の中に
は威厳のある声と風格。さすが日本一の暴力団組織の頂点に立つて
いる男だと思わせる。

その室内に勝が一步踏みだし、即座にドアを閉めた。

「ただいま参りました」

勝の挨拶が始まるや否、甲高い声がドアの外から聞こえた。

「ひつどーい、勝ちゃんの馬鹿！私から逃げるつもりでしょーーー！」

「そ、その声は、はるかか！」

ああ、またこの人の病気が始まつてしまつたのか。いくら刑
務所時代に男の味を知つたからと言つて、何故こんなはるかのこと
なんか……。

勝の嘆きとは裏腹に、北原とはるかは対面を果たした。

「おお、はるか。会いたかったぞ。儂も色々忙しくてな」

「うん、なんか忙しそうだね、元蔵さん」

「なんだ、儂とお前の間柄じや、いつものよつて元ひやんと呼ん
で欲しいもんだ」

はるかの仕返しを予想した勝は苦い顔をした。

「だつてね、勝ちゃんが元ちゃんつて呼んじや駄目つて言つんだ

もん」

「勝ー！」

「はい、よけいな事を申しました。」容赦下せー」

素晴らしい整った顔と体躯を持つて、勝は北原に即座に謝罪した。だが、はるかが仕掛けた仕返しは、北原の説教となつて勝を襲つのである。

「いいか、勝。はるかは儂にとって宝なんじや。心のオアシスだ。お前は、どうもはるかを良く思つとらんようだが、儂とはるかの間を邪魔するのだけは許さんぞ」

「だから、ご容赦下さい」と言つてはるか

なんだつてこの俺が、こんなお釜のために頭を下げなきゃならないんだ！

少しうんざりした様子で勝は言つたが、北原の説教はまだ続いていた。

「なんだ、その言い方は！お前をここまで育てたのは誰だ。大學を出て射撃の腕を上げ、男として磨きを掛けたのはこの儂じや。勝は永遠に続きそうな説教を勝は聞いていたが、仕方なくはるかを見た。

「まあいいじゃない元ちゃん。せっかく会えたのに元ちゃん怒つてばっかり。なにか勝ちゃんに用事があつたんでしょう？私はそれについてただけなんだから」

はるかの声が入り、北原の口はなんとか動きを止めた。

「…はるかがそう言つなら、この事は無かつたことにしょつ。まあいい、本題に入ろう。はるかがいるならなおのことだ」

そう言つて北原は落ちつきを取り戻し、革張りのソファに腰を下ろした。

「まあ、座るがよい」

北原の言葉で勝が対面のソファに腰を下ろしたとき、得意顔のはるかが隣りに座ろうとした。

「はるかはこつりに座るじゃねつ。勝の前だからつて遠慮する」とはない

「私は勝ちゃんの横がいいの…」

「ゴホン、で、話とは何でしょうか」

嫌な方向に話が再び進もうとしたところを、勝の言葉で本筋に戻した。

「ああ、そうじゃったな。高野が裏切ったんじゃ。儂の私邸に爆弾なんぞを仕掛けおつてな。思い出しても腹が立つ。まあ何事もなかつたが…。そこで、高知の奴に任したところ…あいつは役にたたん男じゃ」

年輪のある顔をさらに深めて、北原は話し続けた。

「まあいい、高野組のことだ。他の奴に任せようと思つておるが、心配なのははるかなんじゃ」

なんではるかになるんだ?こんな奴、ギャグのネタにしかならんが…

「いいか勝。高野は儂の弱点を知つておる。はるかだ。余り知られておらんが、高野は前の代替わりの時に儂を調べたことがあってな。知つとるんだ」

ちょうどいいじゃないか、こんな奴なんかいなくなつてしまえば俺の邪魔者もいなくなる。はるかをひとりに使えば…そうだ、それがいい。

「そこで、今もはるかの身を守つている勝に気をつけていてほしいんじゃ」

「それは、気をつけていますとも。親父さんの大切な人ですから…」

そう、たとえこんな奴でもだ!そうじゃなけりやあ、こんな奴の側に寄るかっていうんだ。

「そうか、それは安心した。勝が本腰を入れてはるかを守つてくれるなら大丈夫だろ?」

北原は話が終えたかのように、葉巻に火をつけた。はるかは一応静かに座つていてる。

北原は一向に話し出す気配もない。

しかし、勝は待つっていた。北原からの話の本題を…。

しかし、しかしだ。北原は話し出すどころか、はるかとくだらな

い話を始めた。

「はるかはいつ見ても綺麗じゃのひ。どうだ、こんビゴルフでも一緒に回らんか」

「はるかねえ、ラスベガス行きたいなあ。前から行きたいと思つてたの。もちろん勝ちゃんも一緒によ！」

「そうか、ラスベガスか！良いのう良いのひ」

「あの、親父さん…」

しごれを切らした勝は、北原に話しかけた。

「あの、話というのははるかのボディーガードの件だけですか？」

「そうだが…？」

「この高野組との抗争を、裏には福山組がいるかも知れない、こんな時に…はるかのことだけ…？」

「なにを言つておる。はるかが一番大切じやて！一番重要なことだぞ！心してはるかを守れ！良いな」

なんだつて、親父さんはこんな奴をここまで…。全く涙が出来そうだ…。

納得しないまま勝は事務所を出た。

車には乗つたが、荒っぽい運転になるため、勝は近くの公園に車を止めた。

町中にある、綺麗な公園に綺麗な男と、そして男…。

「くそ、何だつてこんな奴の子守なんだ！」

「私はどつてもラッキー！今日からずっと側にいてね、勝ちゃん」

「…」

怒るな、怒るな。相手は唯の馬鹿じゃないか。そう唯のお釜だ。そう、おかま…おかま…なんで俺の…クールでハードボイルドな生き方の中に、こんなおかまが…。

「ねえ、勝ちゃん。これから仕事なんだ！」

まだ日の高い時間である。妙に晴れ渡つた空が、勝の機嫌を更に悪くした。

「それで、何が言いたいんだ」

「もちろん側にいてね」

爽やかな風がながれるのも、木々がざわめくのも腹が立つた。

「休め。休んだって金に困る訳じゃないだろ?」

「そんなこともないよ。勝ちゃんつたら、あんな家賃の高いところに住むんだもん」

「そりや、誰にも干渉されたくないからなー高級クラブを買い取つて、わざわざ改装したんだ! それなのに…」

「もう、勝ちゃんのおかげで、家賃は一〇〇万も払わされてんのよ」

「お前が横に引っ越してくるからだろ? が…」

怒るな…怒鳴るな… そうだ、俺はクールなハードボイルドなんだ…

「…、家賃が一〇〇万だとしても、親父さんからの生活費に比べれば微々たるものだ。いいか、仕事は休め」

「だめよ! 綺麗でいるためには仕事しなくちゃ! 人に見られることが私を綺麗にするんだから」

「お前の仕事場に俺が行けるか! お前の職場はなんだ!」

「高級ゲーボーイクラブ『ドール』」

「ふん、ゲーボーイクラブに高級も低級もあるか! スケベなはげ親父と、お釜にこびり付いたオロゲの女のたまり場じゃないか! 俺が! この俺が何でいかなきゃならないんだ!」

「じゃあさ、仕事に行かなくても綺麗になる方法があるんだ! それを勝ちゃんが手伝ってくれるのなら仕事は行かないよ」

「なんだ。言つていみろ

そう言つた、勝は嫌な予感がした。次の瞬間、予想は的中し悪寒となつて勝に帰ってきた。

はるかが勝の腕に、そつと腕をからみつけたのだ。

「私の好きな人が…私を抱いてくれることよ…勝ちゃん」

勝の体に鳥肌が一瞬にして広がつた。

「はるか! 仕事に行くぞ!」

「あーん、待つて。まだ仕事には早いよ。ちょっと買い物してから行こうよお」

「ああ、男を売るチャンスなのに、親父さんを守りたいの…なんだって、なんだってこんな奴の子守なんだ！」

1 (後書き)

つづります。

ご意見、ご感想お待ちしています。

「じつは俺さ、泥棒さんなんだ！」

由美子と勇次は三富商店街を歩き回っていた。夕暮れが近づき、空を赤く染め始めた。

「勇次君つて面白いわね」

いつしか自然に笑うようになつた由美子は、夕田を浴びて更に美しくなつた。

「本當だよ。だから君の心も盗めるんだ」

妙に真剣な勇次がおかしくて、由美子はクスクスと笑つていた。そんな二人をはるかが見つけた。

「ねえ、勝ちゃん。勇ちやんだ」

「あんな奴がいたつて、俺は全然嬉しくない。勇次も、俺の干渉されない生活を踏みにじるお前同様、嫌な奴だ」

そう、勇次もだ。泥棒か医学生か知らないが、俺の横に引っこ抜きなんかいやがつた野郎だ。ああ、思い出したくもないのに…「けつこう綺麗な女と歩いてる…」

はるかの言葉に勝の心は動き、瞳がはるかと同じ方向を向いた。

「何? なんで俺がお前みたいな奴で、勇次があんな美女なんだ! なんか間違つていなか?」

「私の方が美人だよ!」

「美人つてのは女のことだ」

「そんな! 男女差別だ! 美しい人のことを美人つて言つの!」

「お前みたいに男のくせに、女のような振る舞いをしてる奴が美しいって言えるのか?」

「ひつどーい。勝ちゃんを思う気持ちは、真珠のように美しく、

汚れないこの思い! なんで? 美しい心と体じゃない!」

こうして意味のない言い合いを、人混みの中で始めてしまつた。

「あれ? 勝さんとはるかちゃんだ…なにをこんな人混みの中で目

立つてんだろう?」

「知り合い?」

「ううと、何でもない。さあ由美子ちゃん、変な奴等はほつといて、お酒でも飲みに行こ!」

遠くから見ていた勇次が、逃げるよつに歩き出した。

「ねえ、ちよつとまって。勇次君」

由美子は早足で歩く勇次に話しかけた。

「さつきの人…山崎…山崎勝つて名前じゃない?」

「…知つてる人?」

「やつき話した昔のクラスメートかも…」

由美子は氣になつて、さつきの場所に戻ろつと言つ出しだが、いきなり一人の間に乱暴な三人の男たちが現れた。

「高野組長の娘さんだな」

柄の悪いチンピラが一人、高野組組長の暗殺を失敗した高知の手下共だつた。

「お嬢さんには恨みは無いんやけど…ちよつと儂らと一緒に來てくれんかの?」

「なに吉本新喜劇の台本みたいなこと言つてんだよ、おつさんたち。ここに格好のいい色男がいるのにさ。由美子ちゃんがおつさんたち不細工についていく訳がないだろ?」

勇次の口を止めようと、由美子はチンピラの前に立ちはだかつた。

「何ですか、あなた達は?」

「高知組のもんや。あなたの親父さんは、儂らを裏切つてなあ。恨むんやつたら親父さん恨めよ」

チンピラ達が由美子の腕を掴もうとした瞬間、勇次の蹴りがチンピラの腕に炸裂した。

「こら、おつさん。由美子ちゃんに汚い手で触らうとすんなよな。汚れるだろ!」

ただ、ポケットの中に手を突つ込んで、立つていただけの勇次にやられたチンピラは激怒した。

「何さらすんじゃ、ぼけえ。儂らの後ろには平山組がおんねんど！ええ！それでもそんな態度取れるんかい！」

勇次はあきれ返った目で、チンピラ共を見下した。

「ああ…これだから不細工な人たちは可哀想で…。男前はな、なんも後ろ立てなくとも格好良く生きていけるのに…。それすら知らないんだねえ」

「勇次君、むやみに挑発するのは止めなさい！」

由美子が止めた瞬間、チンピラ達が勇次に襲いかかつた。

「不細工がいくら束になつても、スーパーハンサム君には勝てない！」

「冗談を言いながら、まず一人を蹴り倒した。勇次の余りに機敏な動きに、後の一人は慎重になり身構えた。

「ほほう、やつと俺様のすごさを知ったかい？これでもまだやる？」

危機を悟った筈のチンピラ達の方が、勇次の不敵な笑みをかき消すかのように、にやりと笑つた。

「へへへ、こりやあすげえ。良かつたぜ、用心してよ」

チンピラの一人が話し終わつたとき、由美子の悲鳴が聞こえた。

「ちつ、仲間いたのか」

勇次が振り返つたとき、由美子は男一人に連れ去られようとしていた。

「くつそ、女の子を手荒に扱うなんて、天が許しても俺が許さん」

「へへへ、俺達がゆるしてんだよ。色男さんよお」

助けに向かつた勇次の前に、対峙していたチンピラ達が道をふさいだ。

「どけえい。お前ら不細工が、この色男の道をふさぐことは、尚更許せん」

勇次の雄叫びと同時に、チンピラ共は勇次に襲いかかつた。

それは映画のアクションシーンを映し出したかのようだつた。

勇次はチンピラのパンチをひらりと避けたと同時に相手の背中を押

し、もう一人のチンピラの足を引っかけた。チンピラ達は重なり合つて倒れ込んだ瞬間に、勇次は由美子の方へ向かつた。

「由美子ちゃん。白馬の王子様のお越しだよっと」

減らず口を叩きながら、由美子を掴んでいた男に飛び蹴りを喰らわし、着地と同時にもう一人を殴りつけた。

「ゆ、勇次君！あなたは…」

「はははは！世紀の大怪盗勇次君ただいま参上」

先ほどまでは白馬の王子様が、軽薄な大怪盗になつて由美子の腕を掴んで走り出した。

商店街を走り抜けたき、息を切らした由美子が立ち止まつた。

「待つて、そんなんに…走れない…」

「あ、ごめん。なんかしつこいそうな奴等だったから…顔からしてもしつこいしそうだつたもんな」

「勇次君…あなたは一体…」

先ほどどの喧嘩慣れは、普通じやないと感じた由美子は、勇次に聞いた。

「あ、白馬の王子様の方にしててくれる？大怪盗より由美子ちゃんには白馬の王子様の方が…」

「まじめに答えて！」

茶化す勇次に、由美子は必死になつた。

「あんな、やぐざよ？さつきのは…喧嘩のプロよ？それを…あなたは一体何者なの？」

「勇次君だよ」

不思議がる由美子に笑顔を見せて答えた。

「だから、白馬の王子様はお姫さまを助けるためには、何だつて出来ちゃうんだよ」

勇次が言い切ると共に現れたのは、しつこい顔の高知組のチンピラ共だつた。

「ほんとに、ひつこいな。白馬の王子様は無敵なんでい。仕方がない。召使いの所に逃げるか」

信じられないと言いたる由美子の腕を掴み、再び勇次は走り出した。

追いかけっこを楽しむかのように、勇次は由美子を連れて逃げる。その逃げる先に見えた看板は…いかがわしい雰囲気が漂つ「高級ゲーボーイクラブ『ドール』」だった。

「はーるかちゃん」

「勇ちゃん!」

なよなよした男の子たちが開店の準備にかかっている場面に、由美子を連れた勇次が走り込んできた。

「ちょっと助けて!俺達追われてるんだ!白馬の王子様もさすがに疲れちゃつて…」

「きやー誰?」このかつこいいお兄さん、はるかの知り合い?」

勇次の回りに、なよなよした綺麗な男の子たちが群がる。それを嫌がっているのか、照れているのか、または喜んでいるのか解らない対応で勇次は答えていた。

「じれじやあ、仕事の邪魔だな」

由美子と勇次の後ろから、低い響きの良い声が聞こえた。

「すみません…すみません…私達追われてて…」

謝りながら振り返る由美子の瞳に映つたのは、彫刻のように整つた勝の姿だった。

「いいえ、お嬢さんの事を言つているではありませんよ。この軽薄そうな男が邪魔だ!と言つてゐるのです。美しい女性なら、一向に構いません」

「勝さん!ラッキー!あんたがいてくれて助かつたよ」

ハードボイルドの美女は付き物。勇次なんかにはもつたいないほどの美女じゃないか!

勇次が話しかけるのも聞かず、勝は由美子に話しかけた。

「何かお困りですか?」

「あ、あの…」

勝ほどの甘い声と、逞しい体、そして深い瞳で見つめられて、頬

の紅潮しない女性はいないだろ？

「勝さん！」

「勝ちやん！」

あんな阿呆共はほつとけ！俺はクールなハードボイルドを生き抜いてやるんだ！あれ？この娘…

「どこかで…会ったことがありますか？」

勝は女を口説くような台詞を並べた。しかし、それは口説く為ではなかつたが、外野は口説いてるようになしか見えなかつた。

「勝ちやん！そんな女、ほつときなさいよ…」

「勝さん！それは俺のお姫さまなんだよ…」

外野がうるさい中、勝は由美子に事情と彼女の事を聞き出そうとするが、余りにも回りがうるさすぎた。

それは、はるかと勇次の妨害だけでは無くなつたからだつた。

「やつと見つけたぜ、色男の兄ちやんよう！女は渡してもうひせ！」

先ほどチンピラ共が店内に乗り込んできたのだった。

「あーしつこいな！あれは俺が口説いてる女なの…」

「そつよー！勇ちやんが早く口説かないから、勝ちやんがあんな女を相手にするんぢやない！」

「はるかちやんもそう思つだろ？だからわ、勝さんをはるかちやん、俺は由美子ちやんね、頼むよ」

「解つたわ！」

「ちよーつとまつたれや、綺麗な兄ちやん達よお」

のけ者にされたことに、ようやく気付いたチンピラ共の怒りの声と、鉄拳が振り込まれた。もちろん勇次とはるかが、それを喰らつはずもない。男の鉄拳は空を切り、不運なことに勝と由美子の間に転げた。それは、この場所でチンピラが転げるに最悪の場所だつた。

「何だ、お前は…」

勝の冷徹な一睨みがチンピラを凍らせた。

「何なんだ！お前たちはわつきからー！勇次ーはるかー少しほ静か

にしろ！何だ。お前等は」

最後のお前等とは、高知組のチンピラ達だった。

「もしかして、…あなたは…山崎…さんでは…」

「そうだ、それがどうしたチンピラ」

勝の容赦ない言いように、チンピラ達はびくついた。

「勝さん、チンピラにそのままチンピラって呼んじゃあ…可哀想と言つもの…」

「勇次は黙つていろ」

由美子を後ろに回しながら、勝はチンピラ達の前に立ちはだかった。

「俺を知つてゐるなら話が早いな。さあ、去ね」

チンピラ共は顔を合わせて、雲の上の人言い返した。

「あの、お言葉ですが…山崎さん。その女は…」

「女あ」

自分の庇つてゐる女を『女』呼ばわりされた勝が口を挟んだ。

「いえ、その、その女性は、高野組組長の娘さんとして…その、高知組長からわざわざここに…」

勝は呆れた顔をした。

なんだつてこんな馬鹿ばかり揃つてるんだ。新法でやくざが弱くなつたとは…本当の事だつたんだなあ…

「高知組は一度失敗した。その名誉挽回と言つ訳か…馬鹿者…それなら人質なんか取らずに、力で見せつけてやれ！関係ない娘さんに手を付けるようなせこい真似すんじゃねえ」

「はつはい…組長にそう伝えます…お許し下さ…ごめん下さい…あの、『容赦下さい』

「わかつた、わかつたから早く行けよ
勝は少々疲れた吐息と共に声を発した。

もちろんチンピラ達は蜘蛛の子を散らすように店から出でいった。

「さすが勝ちゃん！かつ…いい…私の職場を守ってくれたのね…」

「違う」

はるかの言葉を否定して、後ろにかくまっていた由美子に振り返つた。

「怪我はありませんでしたか？」

優しい問いかけに由美子は頬を赤らめた。

それは勝が格好良すぎる為だけではなかつた。由美子にとつて初恋の人、山崎勝だつたからだ。

「ないない！怪我なんかない！俺が守ってきたもんねー、由美子ちゃん」

勇次が急いで二人の間に割つて入つた。

「勇次…お前に聞いてないんだよ」

「勝さん…人の女に手を出すほど飢えてたの？はるかちゃんがいるからねー勝さんには」

勝と勇次の女の取り合いが始まつたと思つたが、由美子が一言…その間に入つた。

「え…はるかさんつて方と…？」

「いいえ、違いますよ。由美子さん。はるかというのは私がボディーガードを頼まれてしている、赤の他人です」

「まあ勝ちゃん！赤の他人だから恋が出来るのよ？」

「お前と恋をした覚えはない」

「早く恋に落ちてよ…由美子ちゃんは僕のだから…」

三人の光景に由美子はおかしくなつて、吹き出してしまつた。余りにも勝の変わりよつと、漫才のよつた三人に心から笑つてしまつた。

「なに笑つてんのよ。さつさと出でつてよ」

はるかがぶつきらぼりに由美子に言つと、真つ先に行動したのは勝だつた。

「そうだな、では行きましょつか由美子さん」

「違うー」

勇次とはるかは一斉に声を上げて一人を止めた。

「由美子ちゃんは追われるんだよ？今、危険だしだ」

「なんでえ、なんでこんな女の肩だいてんのよ、勝ちちゃん」

「ああ！まだ俺も抱いてない肩を！勝さん酷いや」

「ああ、うるさい！もつ、座れ！」

「はるかねー勝ちちゃんの横！絶対横！」

座るにも一騒動が起きたが、一応はるかの横に勝、勝の前に由美子。そして由美子の隣りに勇次で席順は決まった。

「で、由美子さんは高野組長の娘で、勇次に追いかけ回されて困っている…と言うところですか…」

「違うよー俺が助けたんだよ。なんたつて俺は白馬の王子様なんだから」

「勇ちゃんは、ただの泥棒でしょ？」

「やつぱり、本当に泥棒だつたんですね…」

由美子の一言で場は静まり返った。

「ねえ、もしかして勇ちゃん…」

「勇次…お前、泥棒って言つたのか…」

信じられない！といった一人に由美子が弁解した。

「いえ、勇次君は、きっと私を楽しませてくれるために…」

「いいんです由美子さん、こんな軽薄馬鹿を庇わなくって」

勝が由美子に優しく言つて、勇次の話は無くなつた。

「しかしあの連中、もう由美子ちゃんを狙つ」とはないだろ？

…

「いや、高知組は名誉挽回のために、ひつこく追い回すかも知れない。もしかして、家の近くで張つてるかも知れない。由美子さん、お父さんに頼んで迎えに来て貰つてはいかがですか？」

勝の提案に由美子は激しく首を振つた。

「あんな父に助けられたくありません。妾を何人も作り、母を苦しめ、私を孤独に追いやつた父など…あんな父なんかに…守られたくありません」

「何だから言つても、親の世話をになつてんでしょう…」

ぶつきらぼうによそ見しながら言つたはるかの言葉に、由美子は

首を横に振つた。

「なによ、あんた一人で暮らしてるの？」

はるかが初めて由美子の方を見て語りかけた。

「ええ、高校の頃からバイトをして…一人で暮らしています」

「偉いね、由美子ちゃん。ほんとに偉いね」

勇次がひどく感動して、今にも涙を流しそうなのに比べ、勝はじつと由美子を見ていた。

「いいわよ。じゃ、私の家に来なさいよ」

「はるか？」

勝ははるかの言葉が信じられなかつた。

「はるかさん…でも…」

「仕方ないでしょ！勇ちゃんは今にも俺んちに泊まれつて言いそ
うだし、勝ちやんだつてそうなれば黙つてはいないだろうし…言つ
とくけど、あんたの為じやなくて、勝ちやんがあんたを泊めるなん
て言い出さない為よ！調子に乗らないでね」

はるかのぶつきらぼうな言い方が、余りにもワザとらしかつたが、
あえて口にする者はいなかつた。

「ああ、もう今日は仕事にもなんないから、帰りましょ。勝ち
やん」

高知組が乱入してきて、開店の準備はそのままになつていた。散
らかつた室内を片づけて、他のゲーポーイ達は帰つている。

四人は席を立ちドアの方へ進み、店を出た。はるかが店の鍵を預
かつており、鍵を閉めようとした瞬間の出来事だった。

「大人しくしろ！」

「どこから見ても、やくざだつた。

「くそ、しつこい奴等だ。言つてもわからんようだな。逃げるぞ

勇次」

「がつてんだ！由美子さん早く、店の裏側から出よ」

由美子を先に店内に入れ、勇次が続く。

「行くぞはるか」

勝がドアをぐぐりうとした瞬間だつた。

「あーん。鍵が取れない… やつ、なにすんのよ。スケベー離してよ…」

「はるか?」

ドアが閉まり、鍵がガチャという音をたてた。

「なんだ…なんなんだ!」

さつきの連中は… もしかして高野組の…はるかを…はるかを狙つていたのか!

「勇次さん! 退いて! 僕が開けるよ」

勇次が勝を払つてドアノブにしがみついた。

「勇次…外からしか開かないんだ。内側には鍵穴さえない」

「早く追いかけましょ。山崎さん、勇次君! 裏口から…」

「もう、車で行つてしまつたぞ」

なんて事だ… 僕がドジを踏むなんて…。

はるかを高野組に奪われた勝が来る場所は、先程はるかと共に訪れた平山組本部の事務所である。表玄関から暗い表情で入ってくる勝の姿は、事務所に待機している組員にとつて恐怖の何ものでもなかつた。組員達は、深々と頭を下げ挨拶するが、勝は眉一つ動かすことなく通り過ぎていつた。

そして、勝が深々と頭を下げる相手はこの世で唯一人、北原元蔵である。静かな室内が緊張する空気を表すように、一人を取り巻いていた。

「勝」

普段から重圧のある低い声が、更に低くなり勝を呼んだ。北原は硬い表情のまま、怒るわけでもなく話しかけた。

「お前ほどの男がどうしたというのだ」

「申し訳ありません。全て私のミスです」

下げた頭を上げることなく、はつきりした口調で勝は謝罪した。

「儂は理由を聞いているのだぞ？」

「何を言つても言い訳にしかなりません」

勝に言えるはずがない。

敵対関係にある高野の娘に気を取られていて、はるかを奪われたなど口が裂けても言えなかつた。

「はるかお前を可愛がつていて、それは解るな？」

「はい、もちろんです」

「では、儂を失望させないでくれ。お前は自分のミスを自分で補うことの出来る男だ。そうだらう」

北原は厳しい瞳で、勝を見つめていた。

下げていた頭を起こし、勝は北原の瞳を見つめ返した。それは、日本の暴力団組織の頂点に立つ男、自分の魂を動かす男の瞳だつた。普段は穏やかな振りをしているが、やはり唯の凡人には何万とい

う組員はついて行かない。

その組長が、勝にもう一度チャンスをくれたのだ。自分を信頼してくれているのだ。はるかを奪われたという事は平山組の、いや、組長の顔に泥を塗つたと同じ事。なんと情けないことをしてしまつたのか…。

勝は北原の信頼を裏切つてしまつた事を後悔していた。自分のマスを恥じるより、北原に対しての懺悔の気持ちが大きかつた。

次は、決して失敗は許されない。

「はい。はるかを無事に救い出し、この抗争に決着をつけます。組長の信頼を裏切るような不様な真似は決して致しません」

「うむ。欲しい武器があれば持つていくがいい」

北原の言葉を聞き、深く一礼して勝は事務所を出た。

お気に入りのベンツに乗り込み、勝はアクセルを踏んだ。しかし、いつものように軽快な気分にはなれない。不満げに勝は運転していた。

「勝さん…」

後ろのシートから勇次が身を乗り出して勝の名を呼んだが、反応は無かつた。

そしてもう一人、後ろのシートにいた由美子が嘆いた。

「「ごめんなさい…私のせい…なんて謝つたらいいか…本当にごめんなさい」

勝は、一人が乗つていることを忘れていた。由美子の声で、やつと一人の存在を思い出した始末である。それ程、勝の不機嫌、落ち込み加減は深かつた。

「いやつ、俺のミスです。由美子さんが気にすることはない。親父さんも名誉挽回の機会を与えてくれた事だし…本当に、あなたが気にすることはないのです」

勝は自分を責めるような口振りで、重く語つていた。

豪華な車内には、小さなエンジン音が聞こえる程度の静けさが漂つていた。

「ほら！ 何も暗くなることはないって！ 僕が忍び込んで、はるちゃんを助けてあげたらしいし！」

沈黙が耐えきれないのか、勇次が陽気に口を開いた。だが、それは勝の一喝で見事に粉碎するのである。

「馬鹿者！ 高野邸は今や緊急事態体制に入っているだろ？ から、そんな簡単に忍び込めるか！ それに、高野組を何とかしなければ、またはるかが狙われるだけだ…」

「山崎さん… はるかさんのこと、好きなんですね…」

ぱつりと呟いた由美子の言葉に、勝は一瞬言葉を失った。

「…、違います！ 違う… 違うんだ…」

声が大きくなるにつれ、由美子の言葉を肯定していくようで、勝はいつしか黙り込んだ。

違う、俺のミスだからだ。俺の汚点を消すためにはるかを助けるんだ…。組長のために… どうしたら信じてくれるだろ？ …。

由美子に妙な誤解を植え付けながら、車は神戸の繁華街にある勝の部屋に向かっていた。

「さて、どうするかが問題なんだよな」

四〇畳ほどの広い室内の柔らかなソファの上に、何気なく座つている勇次が呟いた。

「おい、勇次。誰がお前をこの部屋に入れていいと言つた？」
黒を基調とした室内には塵一つ無く、勝の几帳面な性格を表していた。

その整つた室内に似つかわしくない茶色い髪と軽薄な声が勝には許せなかつた。

「勇次。誰の許しを得たんだ！」

「まあまあ、勝さんと俺の仲じやない」

「どんな仲なんだ！ お前とは赤の他人だ！」

「そんなことを言つてゐる場合じやないのでは… 無いのでしょうか

…

由美子の仲裁で勝は冷静さを取り戻すが、やはり勇次が部屋に存在することは許せなかつた。

「私はこんなこそ泥に力を借りなくとも、はるかを助け出せます」由美子にそう告げると、勇次を玄関から放り出し、冷たくドアを閉め由美子の隣りに腰を下ろした。

「山崎さんは、高野組を解散：または壊滅させなくてはならないのでしょうか？」

勝は無言のまま頷いた。

「私にいい考えがあります」

強い意志を秘めた瞳が勝に向けられた。

二人きりの空間に緊張した空気が流れ、由美子は話しだした。
「私は父が憎いのです。母を苦しめた父が、私を孤独にした父が…。今から私は恐ろしいことを言います…。それは、余りにも父を憎み、軽蔑しているからです」

一呼吸おき、黙つて聞いている勝に続けて話し始めた。

「病床の母を置き去りにして、幹部会や商売女…愛人の所へ行つて…私と母を暗闇に残して…。私から恋人も友達も…全てを奪つていつた。やくざの娘なんかにした…あんな人なんて…。私がどうなつても、もう悲しむ人もいない…。母の葬儀の時だつて、抗争中だからつて…。私が…私が、高野組を…父である高野真治を…」

「何を言おうとしているんだ！由美子さん？あなたは何を言おうとしているか解つてているのか？」

勝は由美子の細い肩を揺さぶつた。

「だつて、だつて、私は…あの人…が憎い…そして…そして…」

由美子の強かつた瞳から、不安が溢れるよつに、透明な涙の滴が流れた。

白い肌を透かし流れる涙が美しかつた。痛ましい姿が綺麗だつた。勝はこれほど涙の似合う女性に出会つたことはない。

由美子が余りにも優しく、か細く、悲しげだつた。

由美子は取り残された暗闇の中で、父親を待つていたのだ。心細

い時の中で、支えてくれるはずの父を…暖かな時を待っていたのだ。しかし、彼女の待っていた父は、前組長が逝去した下克上の世界を渡っていたのだ。

由美子は支えられないまま、震えながら寂しい時を過ごしてから、傍く見える事を勝は理解した。

だから勝は、由美子を暖めたくて抱き寄せた。

「あなたは自分の心を見失っている。それは、余りにも悲しすぎる…」

あなたは…父を憎いと言いながら…父親の愛情を欲している。自分が死んでも誰も悲しまないと、全ての人を拒絶しながらも、父親だけは…父親だけを欲している。きっと父親の愛を欲している。それが叶えられなかつた分、憎しみへと姿を変えたのだ。

「あなたに、そんなことはさせられない…」

勝は自分の胸の中で、小さく泣く由美子に優しく言った。

「でも、でもはるかさんが捕まってしまったのも、半分以上は私のせいです。私は…私はあなたの役に立ちたい…」

由美子の言葉は勝の言葉を奪うのには十分だつた。

「由美子さん…」

「お願ひ…」

涙の訴えに、勝は由美子の希望に答えた。

「爆弾を仕掛けます。それで、運悪く高野を殺つてしまつかもしません。それで…いいですか？」

「ええ、私に仕掛けさせて下さい。そうでないと私の気が済みません」

二人の落ちついた雰囲気が部屋を包む中、窓の外ではにぎやかな何かが揺れていた。

「つたく！ひどいや！勝さん。由美子ちゃんと二人つきりで一〇分間も過ごすなんて…」

妖しい雰囲気が勝と由美子の間に流れたとき、一五階の窓から侵

入しようとした勇次が現れて、由美子が勇次を部屋へ受け入れた。

「なんだ！お前こそ人の部屋に…なんて所から現れるんだ！ここにはブランドなんて無いビルなんだぞ？それを…窓からなんて…」

深い溜息を一つ吐いて勝は話題を変えた。

「今回…はるかを救出するにあたり…お前の…その、勇次の力をほんの少し借りようと思つ…」

「言いにくい言葉を、勝は必死に述べた。

「最初っから素直に言つてくれればいいのになあ」

「最初はお前がいなくとも出来るはずだつたんだ！俺が一人で侵入してだなあ…」

「「「めんなさい…私のせい…山崎さんが私のわがままを聞いて下さったから…」」

由美子の言葉で、勝は自分が大人げない態度を取つたことに気付いた。

「まあ、そんなことはどうでもいい。勇次は由美子さんの友達…と言つ」とで、高野邸に入つてはるかを救出。由美子さんは時限爆弾を設置して下さい」

「えー、今の状況で友達なんて通用するの？…あ…ねえねえ、俺が由美子ちゃんの恋人で、結婚する報告に行く！…というのはいい作戦だと思つけど…」

「何を言つてるんだ…」

呆れる勝の横で、由美子は勇次の提案に賛成していた。

「いいかも…その方が自然ですよね…。全く帰らなかつた娘が、いきなり友達を連れて家に帰るより、結婚の報告の方が…。それに、父と喧嘩別れになつて部屋に閉じこもつてゐ…つて事にすれば動きやすいし…」

「そりだらう…へへん…俺の意見がどれだけ奥が深いか解つた？

「勝さん！」

「なにか…お前の場合…違う気がするが…」

勝は少し不機嫌に、彼女の意見に賛成した。

「はるかを救出して脱出するときは、屋敷の裏側に逃げてくれ。

俺の部下を配置しておく」

「勝さんの部下って…怖い人？」

「いや、顔が知れてない下つ端の奴にしようつと思つてゐるが…」

「なんだ、和夫君かあ」

「…」

簡単に考えが読まれてしまい、勝は少しむぐれたが大人として、そしてクールな男として、端正なポーカーフェイスを崩すことはしなかつた。

「では、今日の夕刻に…」

勝は自分の部屋の玄関の外で言つた。時は既に朝日が昇ろうとしている。

一騒動の後に、勝の部屋で由美子が休み、勝は勇次の部屋に行くことになった。

「なんて…部屋に住んでいるんだ…」

それは、勇次の部屋に入った勝の驚きの声だつた。

勇次の部屋は、勝と同じくらい広いはずだが、汚いわけではない。妙なのだ。

絵画、仏像、彫刻が部屋を占領し、壁を覆い隠す本棚には医学書が並び、人体模型などが置いてある。

「俺にこの奇妙な部屋で寝ろといふのか？」

「いい部屋でしょ？これだけの美術品に囲まれて寝るなんて、そういう体験できるものじゃない」

勇次は得意気に言つてゐるが、勝は呆れて言葉も出なかつた。

「ねえ、勝さん。由美子ちゃんのこと…どう思つてんの？」

奇妙な部屋の中で、真剣な勇次が果てしなくおかしく見えたが、勝は笑いをこらえた。

「いい子だと思うが？」

「それだけ？」

「何なんだ？…あ、さつきの一〇分間の事を気にしてゐるのか？た

つた一〇分では何もできないぞ」

やつぱり、昔のクラスメイト… つて事は知らないんだ… 知らない方がいいのかなあ? 「こんな時、はるかちゃんがいてくれたら相談… いやいや楽しむのに…」

勇次の奇妙な部屋で、奇妙な関係の一人の男は眠つた。

閑静な高級住宅街の外れに、他とは比べものにならないほどの屋敷と呼べる建物があつた。屋敷の回りにはベンツが数台並び、黒服の男達が見事なまでに配置され、見張つていた。それは高野組組長の私邸である。

「また、ここに戻るなんて… 考えてもみなかつたわ」

独り言か、誰かに向けて話しているのか判別できないほど、遠い瞳で由美子は呟いた。

夕日が由美子の漆黒の髪を照らし、湿つた風が光るそれを揺らした。

「由美子さん…」

勝が心配そうに由美子の名を呼んだ。それは、由美子の姿が余りにも儚く、消えてしまいそうに見えたからかもしれない。

「大丈夫です、山崎さん。覚悟は出来ています」

「大丈夫だよ。俺がついてるし…！安心してよ勝さん！」

「お前だから心配なんだ！たかがコソ泥のくせに、なにか誤解してないか？」

「なに言つてんだよ勝さん。俺は正義のヒロー 義賊の勇次君なんだよ」

妙な沈黙の時間が流れ、由美子と勇次は高野邸に向かつた。

由美子が震える手で、自分の家であつた玄関ホーンを押す一方で、勝は自分を慕つている和夫を呼び寄せていた。

小田和夫は一〇歳の若さと一七歳前後の童顔、そして勝への憧れで出来ている高さ一七〇センチの若者だつた。

「和夫、悪いな。突然呼び出したりして…」

「いいつす！勝兄貴の為なら、全く苦になりません。命すら惜しくないつす」

敵地である高野邸の近くで、和夫は張り切つた声を出した。

「静かにしてくれ。実は頼みがあつて呼んだんだ」

声を潜めて話し出した勝に耳を近づけ、和夫は聞いた。

その内容は、はるかと勇次…そして由美子が今から始める作戦の事だった。

「兄貴…まだ…あんな奴等とつきあつてたんですか…」

「俺だつて好きで付き合つてるわけじゃない！」

「じゃあ、はるかさんなんてどうでも良いじゃないですか…」

そうだつた…和夫は知らなかつたんだ…はるかが親父さんの愛人であることを…。しかし、言えるはずもない。

「いや、可哀想だろ？あいつだつて悪い奴じやない。そいつが捕まつているんだ」

「何で捕まつたんですか？あんな人が」

言えるかつていうんだ！しかし…言わなければ…比奴は納得しそうもないし…しかし、俺の…いや、親父さんの汚点を話す訳にもいかないし…

「い、いや…俺が…その、そう！高野組の奴等が馬鹿で…はるかが俺の恋人が何かと勘違いして…そんで俺が抗争に乗り込んでくると思つたらしくて…それで…はるかを人質に取られて…」

しどろもどろ答える勝を疑わしい目で見ていた和夫が、諦めた表情を見せた。

「解りましたよ…。何だかんだ言つても、はるかさん達が好きなんだから…兄貴は…」

「違う！今日は俺の責任もあるからであつて、決して好きとか嫌いとか関係ない。あ、俺の言うことを信じて無いな！」

「兄貴…兄貴はクールなハードボイルドで僕の憧れなんです。そんなに焦つた兄貴は…」

「焦つてなんか無いぞ、俺は…何を勘違いしているんだ！俺はだなあ…」

と、言い訳するほど嘘っぽく聞こえてしまつ事が悲しくなつた勝は、疲れを感じて諦めた。

「まあ、そんなことはどうでも良いことなんだ。まずは、はるかを救出して高野組を壊滅させる。その為に和夫にやつて貰いたいことがあるんだ」

落ちつきを取り戻した勝は、和夫に作戦を詳しく話した。

「解りました。助け出したはるかさんと勇次さん、そして由美子さんを車で運べば良いんですね」

「そうだ。俺は顔が知られているからな。近くまで行けないんだ。心配だから、このトランシーバーをもつて行け」

「はい。では行つて来ます」

和夫を見送つた勝は、高野邸が見える公園に向かつた。高台にある公園からは、美しい神戸の姿が赤く染まっていた。時はすでに夕刻であつた。

「私は。由美子です」

少し震える声で由美子はインター ホンに向けて自分の名を名乗つた。

「え。お嬢さんですかー早くー早く入つて下さい。ビルに居られたんですか。搜してたんです」

慌てる組員の応答に由美子は落ちついた様子で家に入った。爆弾は勇次が抱えている紙袋に入つている。

「平山組の連中が行きませんでしたか…いや、こ無事で何よりです」

玄関に入るやいな、上品そうだが暴力団組員とわかる男が由美子の前に現れた。

「あの人は?」

「親父さんですか?今、出かけておりまして…」

「ふん、どうせどこかの女の所にでも行つてるんでしょう?」

「口」もる組員をよそに、由美子は自分の部屋がある筈の二階に上がろうとしたとき、勇次の肩を掴まれた。

「なんや、お前はあ。ここをどこやと思つてんねん」

もう一人の人相の悪い男が現れた。

その男から庇うように由美子が前に出た。

「その人は私の彼氏やー結婚しようと思つてる人や…」

「お嬢さん！」

「はいはい、人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んじまえつて言うだろ？さあ由美子ちゃん。いざ行かん！我らの愛のお部屋に！」

「勇次君…」

肩を抱いて階段を上がる勇次に、由美子は赤面しながら部屋に向かつた。

「あの人気が帰つてきたら、私に伝えて！」

呆然とする組員に言つて、由美子と勇次は部屋に入った。
そこはまだ由美子が出ていつた時のままだつた。

「全然変わつてないわ…」

「由美子ちゃんたつら、可愛い部屋に住んでたんだね。今度は邪魔の入らない由美子ちゃんの自宅に呼んで欲しいもんだ」

緊張した表情に笑顔が戻り、優しい声で由美子は話し始めた。

「いろいろごめんなさい…勇次君を巻き込んで…なんてお礼を言つたらいいか…。勇次君のおかげで山崎君にも会えたし…私…嬉しくて…。こんな時なのに、嬉しくて…」

涙が頬を伝う。白い肌に黒い髪が幾筋か落ち、神秘的までに美しく勇次に見えた。その為だろうか、由美子の心を奪うために、こんな危険なことを引き受けたの一瞬忘れさせた。

「なんで勝さんにクラスメートだつた事を言わなかつたの？」

「言えないわ…はるかさんという人もいる様だし…」

「はるかちゃんは…また違うと思うな…。勝さんにとって恋愛つて感じじゃないと思う」

「そうね…彼にとつて、あなたとはるかさんは特別なのよね…それに、はるかさんの事だけじゃなくて…こんな状況で…言えるはずもないし…」

俯く由美子のうなじの白さが、余りにも儚くて、勇次は由美子の肩を掴んだ。

「勝さんはそんなこと気にする人じゃないよ」

「そうね……私を助けよつとして……はるかさんを誘拐されたんだもの……違うの……きっと私……怖いのよ……。山崎君の思い出だけで生きてきたから……その人に拒絶されるのが……怖いの。こうやって山崎君の役に立てるだけで、結構幸せなんだ」

「由美子ちゃん程綺麗な人が何言つてんだよ。もっと幸せになつていいんだ」

勇次は口説いていたのを忘れていた。それ程由美子が可哀想に見えたし、同情もした。

「ありがとう。勇次君」

勇次の胸の中で、小さく震えながら泣いた。人の胸の中で泣くと言つことが、これほど心地よいことを、由美子は忘れていた。由美子は勇次の暖かい腕にずっと抱かれていたなら……と考えたが、由美子には大切な役目があったのだ。自分のせいで人質に取られたはるかを救出しなければならない。

「勇次君……ごめんね……。もう大丈夫だから。さあ、行つて！」

勇次の胸を押して、由美子は心地よい場所から離れた。

「気をつけてね。はるかさんは離れの倉庫にいると思う。爆弾は私が取り付けるから……あの人いそうな場所へ……。取り付けたら屋敷の裏に向かうわ。……もし、もしも私が屋敷の裏に来なかつたら先に逃げて……」

「由美子ちゃん……いいのかい？本当に……。君のお父さんなんだよ

?……それに……」

「それに人殺しね……」

やりきれないといった表情を見せて、由美子は勇次を部屋から出した。

いいのよ……あんな人……母さんを不幸にした男なんて……死んでしまえばいいのよ……

「もう、痛い！」こんな縄しなぐつたつていいでしょ！」

はるかの甲高い声が倉庫の中から聞こえる。

「うるさい！少しは黙つたらどうだ！」「

「ふん、綺麗な私の声が聞けるだけでも感謝して欲しいもんだわ

れ」

「おかまのくせに……」

「あんた、今私のことをおかまつて言つた？ふうん？私に魅力を感じないの？不感症なんじゃない？」

妙に色っぽい声をだしてはるかが挑発した。

「少しは黙つてろ！いや、黙らしてやろうか……」

「あんたたち！三人しかいないじゃない！私を愛する勝ちちゃんが来たら、ぎつたんぎつたんにやつつけられちゃうんだから！離しさいよ！スケベ！」

倉庫の外で聞いていた勇次は笑いをこらえるのに必死だったが、そろそろ助けなければ……と思い、倉庫の前に立つ見張りを難なく片づけて扉を開いた。

「ジャジャジャーン！姫を助ける正義のヒロー勇ちゃん登場！」

呆気にとられた三人の内、扉附近にいた男を蹴りつけ、その男の上に乗つて勇次が現れた。

「なんだえ。なんで勇ちゃんなの？』

不平を言つはるかは、上に乗りかかつていた男の股間を思いつきり膝で蹴つた。

「せつかく助けに来てあげたのにい

股間を抑え苦しむ男を、勇次のパンチでどめを刺し、もう一人の男に飛びかかった。

「私を愛する勝ちちゃんは？」

「えー？」

取つ組み合いをしている勇次に答える暇はなかつた。勇次が取つ組み合いをしている最中に、はるかは自分を縛るロープを外しにか

かつていた。

「もひ、勝ちやんに縛ひれるなんぢこニナビ……」んな不細工達じ
せ……」

た。ロープを外して、靴の底から小さな細身のナイフを五本取り出した。

「こんな不細工達は『ごめんだわ！』

そう言いながら投げたナイフは、勇次の端正な顔の横を通り、不細工な男の肩に刺さった。

モハ、はるかか、ハ、から性にリ、ハ、リ、

「ねえ、勝ちやんは！」

「勝さんは顔が知られてるから、こんな所まで来れないよ」

「アーヴィング」は、由集子の父、アーヴィングの愛の名前だ。

「なんか勇ちゃん暗いね」

— そ う の な の で は な く 、 落 ち 込 ん で る ん だ か ら 、 あ む つ と は 優 し く し て は

た。

「わあー！勝ちやんが浮気しないよ！」、早くかえんなくちゃー！案

「……………」

始めた。

なんか今回俺って最悪

「何? 何か言った?」

庭の茂みに隠れて、勇次は由美子の様子が見えた。

「なあ、はるかちゃん。寄り道していいかい？」

「樂しことるならこいカビ?」

こんな状況で楽しい寄り道なんてあるのだろうか…。

「楽しい」と思つよ…」

「うそつき…」

聞こえないよつにはるかは呟いたが、勇次の後をついていった。

暗闇が支配する時刻。時はすでに八時を回っていた。勇次と由美子が高野邸に来て、一時間が経過していた。

「由美子を呼べ！」

静かに行動していた勇次と、救出されたはるかが、身近に感じるほどの大声を張り上げた人物がいた。それは居間にいた高野組長、由美子の父親だった。

勇次達は息を潜めて、居間の前にある茂みに身を隠した。

勇次とはるかが壁に耳をあてる。

「由美子！今までどこにいたんや

「…」

「まあ、由美子が帰つてきてくれたんならええ。でもな、どこの馬の骨かもわからん男を連れ帰つたそやないか」

「…帰つてきたのではあります。報告にあがつただけです」

冷たい由美子の言葉に、勇次はぞつとした。

あれが怯えていた、悲しんでいた彼女の声なのか？

「由美子！その男はどこにいる！呼んでこい」

「…」

由美子の男であるはるかの勇次が、横で壁に耳を当てているのだから、由美子に呼べるはずがない。

しかし、男は現れた。

「ジャジャジャーン！由美子ちゃんの恋人！勇次君登場！」

「勇次君！」

いきなり窓を割つて入る勇次の姿に、由美子は驚き、はるかは茂みの中で溜息を洩らした。

「つたぐ、好きなんだから…」

はるかの呟きを余所に、勇次は無遠慮に高野に向かつた。

「お嬢さんをいただきます。用事はそれだけです。さあ、由美子ちゃん、行こう」

呆然とする高野に一礼した勇次は、端正な顔を引き締めて由美子の手を取った。

「さあ、行こう」

由美子は勇次の向かう方に、釣られるように付いていった。

窓から来た勇次は、由美子を抱き上げて、再び窓から外へ出た。

「待て！いや、待つてくれ！由美子！父さんを許してくれ。帰つてきてくれ。由美子お」

必死に頼む父親に、顔色一つ変えないで由美子は勇次に抱き上げられていた。

「由美子お」

なりふり構わず娘の名を呼び続ける声に、他の声が入り込んだ。

「親父さん！平山の愛人が逃げました！」

「うるさい！今はそれどころじゃないんだ！」

「父さん……」

組の二」とより、自分を優先する父に、由美子は少しの躊躇いが生まれた。

「由美子帰つてくれ

勇次と由美子は広い庭の茂みに隠れた。

「由美子ちゃん！爆弾は仕掛けた？」

「ええ、仕掛けたけど……」

「じゃあ、もう帰りましょうよ。こんな所にいても面白くないし」辺りが騒がしくなつてきた頃、三人は茂みの中で、小さくなつていた。

「そろそろ、和夫君も待つてるだろ？」「行こうか

勇次の言葉で三人は動き始めた。

「和夫」

「兄貴、勇次さん達、まだ来ません」

「爆発は九時だ、まだ三〇分ある」

「なんか、中が騒がしくなつてきて…あ、見回りが来ました。切れます」

無線機を足下にそのまま落とした和夫に、高野組員が話しかけてきた。

「お前、こんな所に車なんか止めてなにしてんだあ？ああ？子供は帰つて早く寝ろや」

和夫の乗る車を蹴られ、和夫は少しびびつた。しかし、もう一人の男にドアを開けるように言われ、ここで逃げ出す事もできずドアを開けた。

「おい、坊主。この辺に人が来なかつたか」

「いえ、知りません」

「お前、無免許だろ？正直に言わないと警察に言いつけるぞ？ん？」

「ぼ…僕は、無免許なんか…し、してません」

和夫の震える声が、「僕は無免許です！」と言わんばかりに響いた刹那の出来事である。。

「かつずおちやーん、おいたしちゃあだめよーん」

はるかの甲高い声と、勇次の蹴りが塀から降り注いできたため、和夫に話しかけていた男は気を失つた。二人目の男を和夫が思いつきり殴つた。だが、それはあまり相手には効かなかつたようだ。

「和夫君つたら、ホントにやくざかねえ」

無駄口を叩きながら、一人目を片づけると、勇次は由美子に手を差しのべた。

高い塀の向こう側から、由美子が覗いている。その隣にははるかが塀に腰を下ろしていた。

「ああ、勇ちゃんに早く受け取つて貰いなさいよ」

はるかが由美子に逃げるように言つたが、由美子は動じつとまじなかつた。

「何やつてんの？早く登りなさいって」

はるかの言葉を聞くと、由美子は登りかけていた塀を降りた。

「行けない…やつぱり行けないわ…」

由美子がはるかを見上げた。はるかでさえドキリとするほど、月明かりを受けた由美子は美しかった。はるかとは対照的な美しさである。清楚で優しく、そして悲しげだった。美しくても華がなかつた。

「あんた…何考へてんの？」

その姿ははるかしか見えなかつた。すでに塀の内側に降りていた由美子は、はるかに向かつて、小さく言つた。

「美人薄命つていうでしょ…」

「な…何戯けたことを言つてゐのよ…こんな時に…あんたなんか長生きするわよ」

はるかの声が微かに震えた。

「あ、あんたなんて、人の恋路を邪魔する野暮な女なんだから…」

「そうね…山崎さんにちょっと優しくされたからつて、図に乗つちゃたかな…。はるかさんの様に素敵な方が側にいるのに…ね」

「そうよ…うだうだ言つてないで、早く行くわよ…勇ちゃん…この女つたら…」

はるかが勇次に話しかけた隙に、由美子は歩き出した。

「ちよつと…待ちなさいよ！」

「私…やつぱり、父を殺すなんて…出来ない…。私行きます。爆弾…福山組から調達した武器庫に仕掛けたの。凄い爆発が起きるから…早く行つて…」

「待ちなさい…」

はるかの呼ぶ声を振り切り、由美子は走り出した。

「勇ちゃん！勇ちゃん！あの女…行つちゃつた！」

爆発まで約一五分。由美子は父親を殺すことは出来ないと行つて走り去つてしまつた。

「何をやつてるんだ！あいつ等は一体…」

和夫からは連絡は途絶えたきり…そして刻一刻と時間は進んだ。勝はあせりを感じ始めていた。自分で計画を立て、自分で実行するなら容易い。しかし、実行するのは、自称義賊と名乗る医学生と、自分の父親を殺しに行く娘なのだ。

上手く行くはずがない…

不安と焦りが勝の心を支配し始めた頃、和夫は途方に暮れていった。

「…勇次さんも、はるかさんも行っちゃった…俺は？俺どうしよう…」

トランシーバーの存在を忘れきった和夫は、塀の外で一人途方に暮れていたのだ。

一方はるかと勇次は、大忙しだった。

「はるかちゃん！なんで走つてんの？」

「だつて、あんな風に逃げられちゃあ私が苛めたみたいじゃない！」

由美子を追いかけて広い庭を闇に隠れて走る一人には時間がなかつた。

「たぶん居間に向かつてると思つて…お父さんを助けるつて行つたから！」

「もう、爆弾の取り外しとかは、全然間に合わないからな！九時に大爆発だ！」

大声で話しながら勇次とはるかは走つた。その会話は見張りの組員にも聞こえた。だが、勇次達よりも爆弾のことを報告しなければならない。組員達の統率が無くなり始めていた。

「親父さん！危険です！爆弾が仕掛けられているそうです！」

組長のいる居間にかけ込んだ組員が見たのは、由美子と高野が向

かい合つて いる姿だつた。

「知つて おる！ 早く 逃げる！」

「おやつせん」

「武器庫に仕掛けた そつだ。 大爆発するぞ。 これで高野組も終わりだ。 平山組には戻れるはずもなく、 福山組の武器を焼いちまうんだから… 逃げる！」

高野が叫ぶと、 組員は走り去つた。

「父さん… 逃げて…」

由美子の美しい声が かすれて いた。

「やつと、 やつと 由美子が 帰つて きたんだ。 逃げるときはお前と一緒に だ」

「私は 父親を 殺そ うとしたのよ？ 生きる資格なんか 無いわ！」

「由美子ほど 優しい子が… そこまで 追いつめたのは… 儂だ。 すまん かつた。 母さんのこと も… お前のこと も… 後悔しても 遅いかもしれんが、 男に なりたかつたんだ」

高野は 床に 膝を ついた。

それを見守る ように 由美子は 見つめて いた。

「何やつてんの！ あんたたち！」

そこに 元気な はるかの 一声が あがつた。

「メロドラマやつてんじやないわよ！ あんたは 早く死んだつて、 美人薄命には ならないんだから！ 行くわよ！」

はるかと 勇次が 居間にかけ込み、 由美子の腕を 捣んだ。

「父さんを 連れて いって… 私なんて…」

「馬鹿ね、 死ぬなんて いつでも できんのよ！ 今あんたに 死なれちやあ、 勝ちやんに 私が 苛めたと思われるでしょ！ ほら、 おじさん！ あんたが 行かなきや、 この 女びくとも しないんだから…」

はるかの その場に あわない 甲高い 元気な 声が、 張りつめた 空気を 和らげた。

「さて、 行こう…」

勇次が 由美子を 抱き抱え、 走り出 した。

「でも、もう時間が…」

「なに諦めてんの！私には勝ちゃんが待ってるんだから…」
走りながら喚くはるかの声を、かき消す爆音と破壊音が鳴り響いた。

「勝ちゃん」

勝のベンツが玄関を突き破り乗り込んできたのだ。

「早く乗れ！」

「さつすが勝さん！美味しいところで出て来るんだから」

「ベコベコになつたベンツに四人は乗り込み、発進した。

玄関を出た突如、すさまじい爆音が鳴り、炎と煙を一瞬にして吐き出した。

間一髪だった。ベンツだからこそ五人とも助かつたようなものだつた。それ程の爆発だつたのだ。

「高野さん、戦争用の武器…相当持つてましたね」

勝の嫌みに答えるわけでもなく、高野は黙つていた。

「やっぱり愛の力よねえ」

沈黙の合間を縫つて入るよつにはるかが勝の後ろから手を回して言つた。

「違う…あまりにもお前達が頼りにならんし…」

「何だかんだ言つても、勝さんつたら俺達の」と心配してくれてるんだもんない

「違うと言つていいだろ？！」

三人のやりとりを見て、勝の隣で由美子は笑つた。

「「コホン…」で、高野さん、由美子さんこれからどうします？」

車を走らすエンジン音だけが、車の中にあつた。

「もう、高野組は壊滅でしょ？…そして、あなたも無事ではいられない…」

勝の現実のみを語る口調が、余りにも冷たく感じたが、本来殺す

相手なのだから仕方がない。

「父さんを見逃してくれるのでですか？」

由美子は不安そうに勝に尋ねた。

「勝さんだつて鬼じゃないもんな！俺の結婚相手の親父さんを殺すような人じやないよな」

「誰が結婚相手なんだ！あれば作戦上だけだ！由美子さんに迷惑だろう」

勇次の勝手ないい草に、ついむきになつて答えてしまう勝の姿を、高野は驚いていた。

「冷静、冷徹、冷酷、で知られている北原の懷刀のあんたでも…むきになることもあるんやな」

「…」

勝は出来れば見られたく相手に、出来れば見られたくない姿を見せてしまった。

「父さん…山崎さんは、私達の命の恩人なのよ？」

「いや、由美子ちゃんの命の恩人は、この正義のヒロー勇次君だよ？」

「違うわよ！勇ちゃんに教えてあげた、私のおかげでしょ？」
はるかが出しゃばった所を、勝に小突かれ、誰が誰の恩人かといふ論議は取りやめとなつた。

「山崎君…どうか儂等を見逃してくれんやろつか…。高野組は、さつきあんたが言つた通り壊滅、儂等も家も全て失つた」

「それでどうするんです」

「…」

高野は沈黙した。高野に代わつて答えたのは由美子だった。

「私達、日本を出ます。良いでしょ？お父さん」

「由美子…お前が一緒なら、もう望むことはない。男にはなれんかつた今、せめて父親としてお前の側にいさせてくれ」

「じゃ、これにて一件落着ね！」

はるかの妙に元気な声が辺りに響き、暑い夜は静寂の中を駆け抜けて行く。

「あ…」

「どうしたの勝ちゃん？」

「和夫…和夫を忘れてた…」

暑い夜は、まだ続きそうだった。

5 (後書き)

さて、次はついにエピローグです。
ご意見、ご感想をお待ちしています。

「ひどいや、兄貴。俺を忘れて逃げるなんてさ」

病室で包帯に巻かれた和夫が愚痴をこぼす。

見舞いに来た勝：もちろん側には、はるか、勇次の姿もあるが、溜息混じりに呟いた。

「いや、悪かった。しかし、お前は車に乗つてたのに…何でまた

…」
「兄貴のベンツと違つて、俺の乗つてる国産車じゃ、あんな凄い爆発に耐えれるわけ無いじゃないっすか。俺一人逃げたら、駄目だつて思つて…怖かつたけど…待つてたんす」

「馬鹿ねえ。あの騒ぎで、また裏側に戻るわけ無いじゃない。和夫ちゃんもまだまだね。それに引き替え、私を愛する勝ちゃんは…」

「誰だ？はるかを愛する勝とやらは…物好きがいるものだな」
はるかの言葉に、勝は軽く否定の意味を含めた言葉を吐いた。いつもなら、厳しく怒るのだが、先ほど北原元蔵の所ではるかに助けられていたのだ。

「もう、勝ちゃんつたら、照れなくてもいいのに」

「…」

「それはそうと、高野はどうなつたんですか？」

見つけられた時に重傷を負つていた和夫は、二人が外国へ行つたことを知らなかつた。全て勝が金と手続きをし、一人は翌日の夕刻にアメリカに発つた。向こうでの生活は裕福とまではいかないが、一生平凡に暮らせるだけの金を持たせた。

そんなことは勝にとつては良かつたのだ。勝が気になつたのは、由美子の最後の言葉だつた。

「山崎君…今までありがとうございました」

あの呼びかけ…懐かしさをえ感じじる、あの瞳…。勝は気になつていた。

高野親子の事を勇次が説明している間、勝は由美子の事を考えていた。

「勝さん、なにボンヤリしてんの?」

勇次が問い合わせたにも関わらず、勝の応答はなかつた。

勝ちやん！」

はるかが声と共に、腕に絡み付いてきたところで、私は返つた様子で呟いた。

由美子さんなお最後のあの言葉は何んだったんだ？

歴次の茶化す事で、一つかの勝手窓つ。

「違うーーー、なんて言つが

「いやー勝ちやんせ私のことだけを考えてくれなきゃ、ほのか泣

嘘泣きとすぐわかる奴が、ほんかほ泣いた。

あーあー勝ちぐ こくな日 愛い子泣かして 悪いんたなあ

したんだ！」

勝のむきになる姿を見て、和夫はため息をついた。

二十九

「何がいいんだかーーー」の方が勝ちやしない可憐ーーーだから二

はるかが和夫に向かつて言い切つたが、和夫も負けてばかりはいられなかつた。

「お前たちがいるから！兄貴に女がいないんだよ」「いいのよーん。こんな美人が側にいるんだから」「離れろよ！美人つてのは女の事を言つんだから」はるかは、勝の首に腕を絡ませ体をよせつけた。

「何ですつてえ！」

はるかと和夫の争いは終わりが見えなかつた。

「勝さん人気者なんだから…あーあ、俺が変わりたかったよ、ト
ホホホ…」

勇次が由美子のことを思い浮かべながら嘆いた。

なんで、なんで俺の回りにはこんな奴等ばかりなんだ？おかげ
まが体を寄せてくるわ！馬鹿は包帯まみれだし、挙げ句の果てに、
馬鹿に女がないと心配されて…医学生のコソドロなんぞに嫉妬さ
れ…俺はこんな筈じゃなかつたんだ！全く！

「いい加減にしろ！」

勝が叫んだ瞬間に、病室のドアから看護婦が現れた。

「何ですか、ここは病院ですよ！」

看護婦に怒られる勝にとって、美女とハードボイルドの世界はま
だ遠い様子であった。

THE

END

ハピローグ（後書き）

勝・遙・勇次の本当の最終話がありますが、まだまだいろんな物語を終えて書こうと思っています。

実は3人にはいろいろな過去と未来がまっています。

「意見」「感想をいただければ、とても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0862d/>

ハードボイルドに格好よく

2010年10月10日01時06分発行